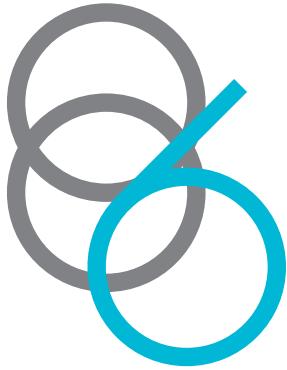


平和文化



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

題字 松井一實
広島平和文化センター会長

活動の幅を広げるユース



「広島こども平和サミット」
「アオギリのうた」の合唱と演奏



「国際フェスタ 2025」
平和首長会議ユース活動報告



「第1回ユース・ピース・ボランティア専門研修」



「国際フェスタ 2025」
安田女子大学文学部書道学科の学生による書道パフォーマンス



「広島こども平和サミット」ユース・ピース・ボランティアによるパネル・ディスカッション

目 次

写真:活動の幅を広げるユース	1	「広島こども平和サミット」を開催しました	6
「無知の知一核兵器の影響を再考する」(倉光静都香)	2	第1回ユース・ピース・ボランティア専門研修を開始しました／	7
被爆体験記「あの日」(宇佐美節子)	3	国際フェスタ2025／	
都市が平和の担い手である理由が再確認された平和首長会議総会	4	令和5年度寄贈資料「新着資料展」を開催中	8





無知の知—核兵器の影響を再考する

倉光 静都香
カーネギー国際平和財団
リサーチアナリスト

2024年7月初旬、当時私が勤務していた軍備管理協会が音頭を取り、当時の岸田文雄内閣総理大臣宛で、日本の外務政務官、外務省の大使、部長、課長、そして核軍縮・不拡散問題担当の内閣総理大臣補佐官に対して、書簡を送りました。それは著名な専門家、元大使、アメリカ政府元高官など8名の連名による「唯一の戦争被爆国であり、核軍縮・廃絶の目標を掲げてきた日本こそ、被爆80周年の節目の2025年に、核兵器の使用や製造が及ぼす人間の心身と環境への影響について論じる、ハイレベルな国際会議を開催するべきである」という内容です。

当時私は米国の政治の中心であるワシントンDCで働き始め、核保有国間を中心とした政治的な緊張と比例して高まる核兵器への依存、そしてその流れに抗う非核兵器保有国の外交努力を目の当たりにしていました。2024年秋の国連総会第一委員会や、日本が議長国を務めた2025年3月の国連安全保障理事会を前に、日本政府にぜひ検討してもらいたい要望として送ったものでしたが、返事をいただくことはありませんでした。

核の時代の幕開けから80年が経過した今日でも、我々人間は、核兵器が人類及び地球にもたらす壊滅的な影響の全容を理解できていません。核兵器の短期的、長期的、物理的、精神的、社会的影響についての研究課題は山積し、核がもたらす被害についての情報は依然として不確実性に包まれています。

ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾の被害状況の報道や表現は、約7年もの間プレスコードによる厳しい言論・情報統制が敷かれ、封じられました。世界においても、核開発、核実験が行われた多くの場所はマイノリティの暮らす地域であり、¹被害の矮小化や、依然として続く情報の非公開により、核によって甚大な被害を受けた人々の声は世界に十分に届いていません。

そして、人類が核兵器の及ぼす影響について完全に理解していないにも関わらず、地球の存続の命運は核兵器国が為政者によって握られています。

非人道性に着目し軍縮を目指す「人道的アプローチ」は、核兵器の文脈では、2010年代から注目を集めました。核軍縮における人道的アプローチは、非人道的な

〔くらみつ しずか〕

ジェームズマーティン不拡散研究所 (CNS) や国連軍縮研究所 (UNIDIR) インターン、軍備管理協会 (ACA) リサーチアシスタントを経て現職。ミドルベリー国際大学院にて修士号 (不拡散専攻) を取得。広島県出身

影響を鑑みて、核兵器の存在は非核兵器保有国の安全保障を脅かすものであり、人類の存続のために核廃絶を目指すべきという考えに基づいています。

人道的アプローチの発展による大きな産物は、核兵器禁止条約です。「核兵器の人道的影響に関する国際会議」² や国連で行われる会議での「核兵器の人道的結果に関する共同声明」等を経て2017年に国連で採択され、2021年に発効しました。日本の被爆者だけではなく世界中のグローバルヒバクシャの声を中心には、外交官、政府、市民社会が、核兵器の国境や世代を超える破壊的な影響についての理解と危機意識を深め、一丸となって作った条約です。

2013年オスロ（ノルウェー）で始まった「核兵器の人道的影響に関する国際会議」は、2014年ナヤリット（メキシコ）、同年の2014年、また2022年ウィーン（オーストリア）で過去4回の開催がありました。

核兵器禁止条約への機運を高めたきっかけとなったこの「核兵器の人道的影響に関する国際会議」は元々、核兵器の使用がもたらす悲惨な結果を多角的に検討し、専門家や様々なアクターと共に科学・技術的観点から事実に基づく議論を行うことを主旨としていました。

核兵器禁止条約の締約国会議とは別の会議として、核兵器の影響に関する最新の研究発表や科学的証拠に基づいた議論をする場を設けるメリットは、条約の締約国外からの参加や貢献を促しやすくするという点にあります。しかし、2023年の核兵器禁止条約の第2回締約国会議以降は、非人道性に関する議論は締約国会議の一部に組み込まれるという流れが続いている。

核兵器禁止条約の支持不支持に関わらず、核の脅威に脅かされ続ける限り、全ての国家、人類はこの核兵器の非人道性に関する議論を続けなければなりません。

岸田元総理は地元広島で開催した2023年G7サミットの際「各国のハイレベルを含め、国際社会に対して被爆の実相をしっかりと伝えていくことは、核軍縮に向けたあらゆる取り組みの原点として重要」であると強調しました。

世界の指導者が核兵器の製造、実験、使用によってもたらされる影響への理解と認識を持ち、将来の世代

¹例に、アルジェリアのサハラ砂漠、カザフスタンのセミパラチンスク、マーシャル諸島のビキニ環礁、アメリカのネバダ州、中国の新疆ウイグル自治区ロブノール、オーストラリアのマラリンガなど。

²Conference on the Humanitarian Impact of Nuclear Weapons (HINW)と呼ばれる。

がなぜ「核戦争に勝者はいない」³ のかを理解できるように国際社会をリードする、日本のリーダーシップに期待が持てる発言でした。

昨年の国連総会決議では、アイルランドとニュージーランドが主導した、「核戦争の影響に関する科学的な研究についての決議案」が採択され、130カ国を超える賛同のもと、約35年ぶりとなる専門家パネルが設置されました。核保有国であり、核への依存を近年益々高めているフランスやイギリス、アメリカは決議案に反対票を投じる際、核戦争がもたらす壊滅的な影響に関しては「既知であり」新たな理解や研究を深める必要性はないという見解を示しました。

核兵器が人類にどのような影響をもたらすのか。核兵器使用、核実験再開の危機に瀕する今こそ、被爆の

³1985年米国のレーガン大統領、ソ連のゴルバチョフ書記長の共同声明、また2022年1月の米露中仏英5カ国共同声明より。

実相について我々人間は何を知っていて、何を知らないのかを再考し、無知を知覚すべき時です。核兵器のない世界に向けた国際賢人会議も、核軍拡競争の阻止と拡散リスクの低減のために、全ての国が核の危険性に関する啓発の取り組みを支持、促進すべきと提言しています。⁴

ヒロシマ・ナガサキを経験した日本には、核兵器の影響について学び、研究し、発信するためのリソースがあり、核兵器の影響について理解を深める国際的な動きを主導していく能力と責任があります。昨年私が関わった、日本政府へ核兵器の影響についての国際会議開催を求める提言は、節目の年に限らず、意義を持つものであると考えています。

(2025年11月)

⁴核兵器のない世界に向けた国際賢人会議「核危機の瀬戸際からの脱却：核兵器のない世界に向けた緊急行動」2025年3月。核兵器のない世界に向けた国際賢人会議は、2022年1月に岸田元総理が施政方針演説で立ち上げを表明し、6回の会合を経て提言をまとめた。



被爆体験記

あの日

宇佐美 節子
本財団被爆体験証言者

私は1941年10月、今の広島市安佐南区祇園で生まれました。私は、母と「お爺ちゃん、お婆ちゃん」と呼んでいた母の叔母夫婦と4人で、バス通りに沿った大きな貸家に住んでいました。そして、母屋にはおばさんとお姉さん、3人のお兄ちゃんがいました。私はこの家族と兄弟のように育ちました。

あの日——1945年8月6日。

早朝から鳴っていた空襲警報が解除され、澄み切った青空の真夏日でした。お爺ちゃんとお母さんも近くの軍需工場、油谷重工や三菱製機へ行き、母屋のお兄ちゃん達も学徒動員されて建物疎開作業へ。一番上の一彦君は今の佐伯区宮内へ、二番目の正治君は爆心地より0.8キロ離れた八丁堀方面へ行きました。正治君が出かける時、玄関先で泣いていた私をおんぶして、あやしてくれました。お婆ちゃんが「ありがとうね。遅うなるけえ、早う行きんさい。」と言いました。

午前8時15分——。

「ピカーッ」と輪郭のない太陽のような光で空が明るくなった瞬間、「ドーン！」と地面が割れるよう

〔うさみ せつこ〕

1941年生まれ、84歳。3歳の時、爆心地から4.1km離れた自宅の縁側で遊んでいたときに被爆。

物凄い音がしました。一瞬、あたりが「シーン」となりました。気が付くと、お婆ちゃんは縁側で遊んでいた私を抱えて、押し入れの隅に隠れていきました。辺りはガラスが飛び散り、襖や畳に突き刺さっています。額にガラスが刺さり、血だらけになって泣き叫ぶ私に、お婆ちゃんはやっと気が付き、ガラスを抜き、転がっていたタバコ入れの中の刻みタバコを貼りつけ、手拭いでしばってくれました。そのまま庭に掘った防空壕へ、母屋のおばさんと駆け込みました。



作者・提供：宇佐美 節子

り、血だらけになって泣き叫ぶ私に、お婆ちゃんはやっと気が付き、ガラスを抜き、転がっていたタバコ入れの中の刻みタバコを貼りつけ、手拭いでしばってくれました。そのまま庭に掘った防空壕へ、母屋のおばさんと駆け込みました。



作者・提供：宇佐美 節子

しばらくして、表のバス通りが騒がしくなり、表に出て広島の方を見ると、焼けた紙きれや布、ゴミを含

んだ煙が「ワーッ」と押し寄せてきます。バス通りに出てみると、広島の方から焼けただれ、皮膚がめくれ両手の先で垂れ下がっている人々が次々と歩いてきました。男性か女性かも分かりません。髪はボウボウで、みんな水を求める、防火用桶の水を飲んでいます。近くの人が洗面器の水を差し出すと、負傷者を積んだトラックの兵隊さんが「水をやったらいけん！ 早う死ぬるよ！」と叫びます。藁の案山子が焼けたような人が、防火用桶に寄りかかって死んでいました。

そのうち、夕立のような雨が降ってきました。近くの熊野神社には避難してきた人でいっぱいです。亡くなった人を神社の裏の油谷重工の空き地で焼いています。その嫌な臭いが二、三日、町中に漂いました。

昼過ぎ、一彦君が帰ってきました。正治君はまだ帰ってきていません。夜、「今晚は、今晚は、沖さーん！」と声がします。「正治が帰ってきたー！」皆大喜びで出迎えました。救援隊の人は、正治君の友達も連れてきていました。裸電球の下で見る二人は、顔は赤く腫れ上がり、目は潰れ、唇はめくれ、服はボロボロ。胸は焼けただれ、人間ではなく物体のようにしか見えません。おばさんは「あなた誰？ どっちが正治？」と聞きます。一彦君が「お母さん、よう見んさい。ベルトを。こっち、こっちが正治よ。僕が



作者・提供：宇佐美 節子

あげたベルトじゃけえ。」と言いました。「えー、まさはるかー、まーちゃんかー、どうして、どうしてこうようになったん……」おばさんはその場に泣き崩れました。朝、元気よく送り出した我が子ではありません。私をおんぶしてあやしてくれた正治お兄ちゃんではありません。救援隊の人はもう一人の子供のことを、「この子の家は焼けていたので、身内の人を探してきます。今夜一晩泊めてやってください。あまり水を与えないでください。」と言って帰られました。

二人は一晩中うめき苦しみ、水を欲しがります。私が水を渡そうとすると、おばさんが「せっちゃん、正治に水をやったら早う死ぬるんよ。」と言いました。私は「死」ということが分かりませんでした。正治君は8月7日、亡くなりました。もう一人のお友達は「おばさん、母はまだ来ませんか？」と細い声で言いながら、正治君の後を追うように亡くなりました。

あの日、約8,200人の学生たちが建物疎開作業に動員され、市内6か所で作業していました。軍需工場に動員された上級生は市街周辺にあったため多くが難

を逃れましたが、建物疎開作業は屋外であったため、中学生・女学生の1、2年生およそ6,300人の命を一挙に奪ってしまいました。町内から建物疎開作業に出ていた義勇隊の人を合わせると、約18,000人と言われています。戦争をしない、武器を持たない子供たちに、なんということをしたのでしょうか。原子爆弾は一瞬にして大量破壊・大量殺戮を無差別に引き起こしたのです。原子爆弾の被害はこの時だけで終わったではありません。核分裂の際に発生するガンマ線や中性子線などの放射線の被害は、人の細胞を破壊して深刻な障害を引き起こします。今でも人々を苦しめています。放射線の影響については、今もなお十分に解明されていません。被爆者は心と体に不安を抱えながら生きています。

被爆者の声を忘れないでください。あの惨劇を、二度と起こさないでください。戦争は人の心の奥に巣く魔性を呼び起します。「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから。」——原爆死没者慰靈碑に記されています。

日本は戦争をやめ、新しい平和憲法を作り、新しい日本国建設に努力して80年、戦争をしていません。この平和が長く続きますように。被爆国である日本のリーダー、そして世界のリーダーの意識の変革を、心より願います。

都市が平和の担い手である理由が再確認された平和首長会議総会

本年8月7日から10日までの4日間、長崎市において第11回平和首長会議総会を開催しました。総会では、今後の平和首長会議の活動方針を考えるに当たって、都市はなぜ平和の担い手になるのかについて、様々な議論が行われましたので、ご紹介します。

1 基調講演で示された「都市が平和をつくる主体である理由」

開会に際し、まず、国連大学（東京都港区）のチリツィ・マルワラ学長による基調講演が行われ、「都市の役割」に関して示唆に富むお話をいただきました。

（1）平和は条約ではなく“人”が築く

マルワラ学長は冒頭、国連大学が1975年、第二次世界大戦の終結から30年後に創設された背景に触れ、「平和は外交や条約だけでなく、教育・研究、そして正義と持続可能な社会を支える知識を育むことによっ

て実現する。」と
いう認識のもとに
設立されたことを
紹介しました。そ
の上で、国連大学
の根底には「平和
は条約や制度に
よって自動的にも
たらされるものではなく、人によって築かれる。」と
いう一つの明確な信念があると強調しました。知識を
持った市民、エンパワーされた地域社会、そして共感
と行動力を備えた次の世代こそが、より良い世界を形
づくるというこの考え方は、都市という場を通じて平
和の基盤を育てようとする本総会のテーマと深く結び
つくものでした。



マルワラ国連大学学長基調講演

(2) 都市のリーダーシップと“倫理的想像力”

続いて学長は、市長の役割について触れ、都市のリーダーは単に自治体を運営するだけでなく、市民が抱く倫理的な想像力に直接働きかけ、その形成を担っている。市長のリーダーシップは、人々との距離の近さ、信頼、そして日常生活の現実に根差したものである。その上で、都市が連帶する平和首長会議は、核兵器廃絶や平和文化、人間の尊厳の擁護といった地球規模課題に対し、都市の声を力強く世界へ届けていると評価されました。さらに、こうした平和首長会議の活動の積み重ねが、都市が戦時には標的となりながらも、同時に危機の時代に平和を支える主体となることを、世界に力強く示してきたと述べました。

(3) 平和の概念の変化と、都市が果たす新たな役割

さらに学長は、平和とは単に戦争がない状態ではなく、正義、持続可能性、そして包摂的なガバナンスが存在する状態であると強調しました。国連創設80年と広島・長崎への原爆投下から80年という節目に触れつつ、将来世代にどのような世界を残すのかという問いこそが、国連と国連大学の使命の核心であると指摘しました。また、気候・環境危機や人口動態の変化、公正な教育・デジタルリテラシーの確保などを緊急の課題として挙げ、SDGs全体の進捗が、全体として遅れている現状を踏まえ、恐怖に依拠した抑止ではなく、人間の尊厳、信頼、対話、そして平和文化を基盤とする秩序への転換が必要だと訴えました。

(4) 記憶を未来へとつなぐ都市としての広島・長崎

講演の結びで学長は、広島・長崎が「記憶の都市」として果たしてきた特別な役割に改めて言及しました。

被爆者の証言は、記憶を忘却から守り、未来に向けて教訓を手渡す道徳的な営みであると述べ、記憶を行動や希望へとつなげてきた両都市の歩みを高く評価しました。

2 会議Ⅰ「核兵器のない世界の実現

—都市の役割—における議論

基調講演に続き開催した会議Ⅰでは、核兵器廃絶に向けた都市の責任と役割について活発な議論が交わされました。パネリストの樋川和子・長崎大学教授・核兵器廃絶研究センター副センター長は人々の価値観や自己規律、他者への尊重といった「公共善を支える力」は、国家よりもむしろ都市の中でこそ育まれると強調しました。なぜなら、信頼、誠実さ、尊重、協力、分かち合いといった美德は、日常生活での市民としての活動に立脚するものだからです。人々が社会や文化の中で他者への尊重や自己規制を身につけ、その利他的な価値感が平和を支える力となる



会議Ⅰ

こと、そしてそれを育てる場として都市が極めて重要なという指摘は、基調講演とも通じる重要な論点となりました。

3 平和を育て、次世代へとつなぐ都市の重要な役割

今回の総会を通じて改めて確認されたのは、都市こそが平和をつくり、育てる主体であるという点です。教育、文化、日常生活という都市の営みそのものが平和の基盤を形成しますし、市民に最も近い行政主体として、都市は人々の価値観や倫理観を育む場であり続けています。

こうした認識は、都市の力を結集する平和首長会議の役割が今後さらに重要性を増すことを示しています。世界166か国・8,500を超える都市で構成される国際平和ネットワークとして、平和首長会議は、核兵器廃絶と恒久平和の実現に向け、都市の声と実践を国際社会につなぐプラットフォームとしての機能を強化し、加盟都市間の連携を一層深めていきます。また、次世代が「平和のバトン」を確実に受け継げるよう、都市が持つ教育的・文化的資源を生かした取組を戦略的に推進していきます。

(平和首長会議・国際政策課)

「広島こども平和サミット」を開催しました

平和文化月間の11月16日、平和記念資料館のメモリアルホールで約170人の参加を得て開催しました。

オープニングイベントでは、パンフルート、ピアノ、バイオリンの3種類の被爆楽器による演奏を行いました。まず始めに、安田女子中学高等学校管弦楽部が、爆心地から530mの中区中町の白神社前の被爆樹木ムクノキを用いて製作されたバイオリンによる「広島の空」の演奏を行いました。次に、千田パンフルート合唱隊が、爆心地から1,640mの千田小学校の被爆樹木カイヅカイブキを用いて製作されたパンフルートと、爆心地から1,800mの中区千田町の民家で被爆したピアノによる「翼をください」の演奏を行いました。最後に、被爆楽器の演奏に合わせて、参加者全員で「アオギリのうた」を合唱しました。



「翼をください」の演奏

第1部では、児童文学作家の朽木祥さんにより、「～ヒロシマのこどもたちと考える～「忘れないこと」、「悼むこと」、その先には？」をテーマに、講演いただきました。朽木さんは、講演の中で、記憶の継承にあ



朽木祥さんによる講演

なことが起きたのか、その背景にある愚かな思想や体制も伝えていかなければならない。そして現代に生きる私たちが「負の記憶を継承することは、二度と同じ過ちを繰り返さないよう警戒することに繋がる。」と語られました。また、「読者が戦争や平和を自分ごととして捉え、犠牲者に共感共苦を抱くことができるような物語が書ければ。」と話されました。参加した中学生から、「心に残る本を書く上で、大切にされていることは何ですか。」との質問があり、「例えば児童向

たって歴史的な認識や理解を深めることの大切さについて触れられました。すなわち起きたことの悲惨さを伝えるだけでなく、どうしてそのよう

けであっても、こどもの知性を信じて手加減せずに書き、情景描写や行間からも思いが伝わるように努めている。」と回答されました。

第2部の「平和のバトンをつないでいこう」では、まず、袋町小学校の児童が、平和学習を受けた際に投げ掛けられた「平和の反対は、何だと思いますか？」という問い合わせを基に考えた平和への取組について発表を行いました。その中で、平和学習で大切にしていることは、「自分事」として考え、「自分の言葉」で伝えることであり、「①知る・考えること、②伝える・交流すること」の繰り返しが大切であると説明しました。また、実際に、袋町小学校で被爆された方から直接話を聞き、被爆の実相を知った上で、市内外の学校との交流を通して、伝える活動を実践したことについて発表しました。

続く、吉島中学校の生徒は、「ともに～生徒会から広がる輪～」というテーマで、平和への取組を発表しました。その中で、吉島中学校の平和宣言「①事実を受け止め、後世に残していくこと、②小さな平和を大切にしていくこと」を紹介しました。また、具体的な活動として、被爆ピアノについて



広島市立吉島中学校による
平和の取組発表

学んだこと、体育祭や地域ボランティアなど、小さなことから平和について考えて行動したことなどを発表しました。

最後のユース・ピース・ボランティアによる取組発表では、まず、「ヒロシマ平和学習受入プログラム」で全国のこどもたちの平和学習をサポートした活動について、研修から本番当日までの様子を振り返りながら概要説明を行い、また、動画を放映しました。

続く、パネル・ディスカッションでは、英語で活動している、高校生・大学生のユース・ピース・ボランティアである大学4年生の玉城陽菜多さんが、モダレーターとなり、パネリストの話を聞きました。

パネリストとして参加した稻生志緒理さん、齊藤里帆さん、阪田夏帆さん、矢澤輝一さん、山下裕子さんの中学生3名、高校生2名は、8月5日～7日に開催した「全国平和学習の集い」をサポートするボランティア活動に参加した動機を紹介した後、テーマ1「広島の代表として全国から来たこどもたちと議論してどう感じたか。」についてディスカッションしました。パネリストからは、「当日は緊張したが、研修で学んだ

ことが役に立った。」、「上手く議論を進めることができ、自信がついた。」という意見がありました。

次に、テーマ2「今回学んだことを活かして、これからどういう風に平和への取組を行っていきたいか。」では、「大きなテーマだったが、まずは、身近な自分ができる小さなことから始めたい。」「英語ボランティアとして、次の段階へ進みたい。」という意見が多く聞かれました。



ユース・ピース・ボランティアによる
パネル・ディスカッション

質疑応答では、参加した若者から、「若者が平和活動を行うことの意義はどのようなことがあると思うか。」との質問があり、パネリストの山下裕子さんが、「若者が、大人にもっとこうしてほしいと言うだけでなく、ボランティア活動などを通して平和について学び、実際に行動することで、自分たちが望むような未来をつくることに繋がるのではないかと思う。」と回答しました。

参加者からは、「平和について改めて考える1日となり、自分でできることをしていこうと思った。」、「素晴らしいサミットだった。平和について深く考え、新たな価値観を手に入れられた良い機会となった。」といった声が寄せられました。

(平和学習課)

第1回ユース・ピース・ボランティア 専門研修を開始しました

令和7年11月から、ユース・ピース・ボランティアの大学生10名を対象に、核兵器廃絶の課題に社会的・構造的に取組む力量を身につけることを目的とした、「第1回ユース・ピース・ボランティア専門研修」を開始しました。

研修では、被爆の実相のさらに深い理解に加え、核軍縮、人道イニシアティブ、国際関係論などの講義やグループ討議を通して、主体的に核兵器の非人道性を発信するための専門知識を習得し、若い世代として戦争や核兵器の廃絶を進める力を獲得するためのプログラムを実施していくことっています。

このため、研修中には、大学教員や報道関係者など、広島・長崎の第一線で活躍する専門家から、各分野に関する講義を受講するとともに、習得した専門知識を基にグループによる討議や意見交換を重ね、最終的に

来年3月に開催する報告会で「核兵器廃絶に向けたヒロシマ・ユース・ピース・ボランティアの提言」を発表することを目標にしています。

この研修では、とりわけ、核兵器の非人道性などに関する深い理解や、多様な背景を持つ人々と共に平和構築活動を広めるコンピテンシー（知識・スキル・姿勢）を身に付けることを重視しており、11月23日に開催された第1講では、広島平和文化センターの谷副理事長から「人道イニシアティブ」に関する講義を受講するとともに、今年8月6日に開催した被爆80周年特別国際シンポジウムに向けて当センターで作成



専門研修第1講の様子

した映像作品「人類の壊滅に内実を与えるヒロシマの原爆体験」を視聴しました。さらに、広島大学大学院人間社会科学研究科教授の中矢礼美先生による「ユース・ピース・ボランティア コンピテンシー」に関する講義を受講し、核兵器の非人道性に関する理解を基に、多様な背景を持つ人々と共に平和構築活動（戦争や核兵器の廃絶を進める活動など）を広めるための知識・スキル・姿勢を学びました。

12月からも月に1～2回のペースで、安全保障、核軍縮、核兵器を巡る世界情勢などの講義を受講するとともに、来年2月には、長崎視察を行い、長崎の専門家による講義や、原爆資料館をはじめとした平和関連施設の視察などを予定しています。

また、受講生は、この研修の終了後に引き続きユース・ピース・ボランティアとして、国連ユース非核リーダー基金派遣者や国連軍縮フェローズの若手外交官が広島を訪問した際の討議のリード役として活動いただくとともに、受講生のうち2名程度を令和8年5月に開かれるNPT（核不拡散条約）再検討会議の関連会合に派遣することなども検討しています。

広島平和文化センターとしては、「ヒロシマ平和学習受入プログラム」に参加した多くの中学生・高校生の活動意欲が高まっていることを踏まえ、この専門研修の受講生を一つの到達点とし、中学生から大学生までを一貫するユース・ピース・ボランティア体系の下での人材育成を目指すことにしています。

また、活動後も、ボランティアを経験した若い世代に、平和を大切にする広島のまちの担い手となつてもらうとともに、各界で平和人材として活躍することを期待しています。

(平和文化企画課)

ユース・ピース・ボランティア専門研修に期待すること



《中矢礼美 広島大学 大学院人間社会科学研究科 国際教育開発プログラム 教授》

大学生・大学院生がユース・ピース・ボランティア、将来社会人としても平和構築活動を推進していけるコンピテンシーの育成を目指して、体系的に組み立てられた本研修は、非常に意義深いものです。

研修の最終成果としての提言は、単なる理想を語ることではなく、多様な背景や役割をもつ人々に、論理的・合理的で説得力ある平和構築にむけたステップを示し、協働を促す力を示すものです。

提言力は未来を描く力であり、未来への考え方は現在の行動を形づくり、人々の社会変革力を高める活動へと広がります。

この提言力の向上に向けて、すべての研究講義が組み立てられています。第1回研修後のコンピテンシー自己評価では、「同じ意見を持つ人と合意形成するのは簡単であるため、異なる意見を持つ人と共に取り組むことが重要だと学んだ」「創造的なアイデアを出すことはできなかったがジレンマの例を挙げて話すことはできた」などの記述がありました。

参加者は、講義で理解した知識をもとに、平和にむけた活動の在り方を議論することで、ユース・ピース・ボランティアのコンピテンシーを着実に向上させているようです。3月までの研修を通じて、参加者の皆さんのが平和構築エンジニア、そして平和構築に向けて協働する人々を育てる平和教育者へと成長されることを心から期待しています。

国際フェスタ2025 ~ひらこう世界のとびら であおう世界のなかま~

令和7年11月16日（日）、広島国際会議場とその南側平和大通り緑地帯を会場に、開催しました。

広島市や近郊で国際交流、国際協力活動をしている67の市民団体や企業が、多文化共生・異文化理解や地球環境・日本文化体験など多彩な事業を催し、約2,200人の外国人や日本人の来場者が、世界各国の文化に触れる一日となりました。

オープニングセレモニー

オープニングセレモニーでは、安田女子大学文学部書道学科の学生による書道パフォーマンスが披露され、「輪」を、ダイナミックに書き上げ、見学者から大きな拍手が起きました（表紙）。

トークショー

「丸山ゴンザレス氏に聞く世界のウラオモテ」

ゲストスピーカーに、世界各地を取材されているジャーナリストの丸山ゴンザレスさんを迎える、ニュースで見るだけではなく現地に行くことの大切さなどの他、情報の発信の仕方、受け取り方などのメッセージをクロストークで深め、300名近い来場者と共に世界の課題を考える時間となりました。



講演する丸山ゴンザレス氏
(国際市民交流課)

令和5年度寄贈資料「新着資料展」を開催中 幾つもの思いを重ねて

平和記念資料館には、被爆から80年を経た今でも、被爆者やその遺族から、ご遺品や被爆にまつわる資料が寄せられています。今回の展示では令和5年度に寄贈された資料の中から126点を紹介しています。

正面看板に描かれている女の子は、展示でご紹介している広島第一高等女学校の倉西美智枝さん（当時13歳）です。遺品となった名札が空に向かって光を放ち、次世代へのバトンとして引き継ぎとして引き継



令和5年度寄贈資料「新着資料展」会場入口

がれていく様子を表現しています。

また、展示の最後には、来場者が思いを綴る付箋コーナーを設置しました。寄贈者の様々な思いに、それを見た方たちの気持ちを一緒に重ねる場を作りたいと考えたからです。色とりどりの付箋に、様々な言語で書かれた幾つもの思いが重なり繋がっていく様子に、希望を感じました。



令和5年度寄贈資料「新着資料展」付箋コーナー

(平和記念資料館 学芸展示課)